

「髄液バイオマーカーを用いた軽症アルツハイマー病における漢字想起障害の臨床的意義」

第 39 回日本認知症学会学術集会（2020 年 11 月 26 日 - 28 日@名古屋）

【発表者】 葛谷 聡 1, 宮本 将和 1, 山本 洋介 2, 打田 倫子 1, 國立 淳子 1,
江川 斉宏 1, 木下 彩栄 3, 福原 俊一 2, 高橋 良輔 1

【所属】 1 京都大学医学研究科 臨床神経学、2 京都大学医学研究科 社会健康医学系 医療
疫学分野、3 京都大学医学研究科 人間健康科学系 在宅医療看護

【目的】

以前よりアルツハイマー病（以下、AD）患者では病初期から出現する漢字想起障害が知られているが、その神経基盤は明らかにされていない。髄液バイオマーカー診断された軽症 AD 患者の漢字想起障害の臨床的意義を検討する。

【方法】

対象はもの忘れを主訴とする 55 歳以上の当院患者のうち、臨床的に軽症 AD が疑われて髄液 AD バイオマーカーを測定した疾患群 57 症例と物忘れを認めない健常群 56 症例。疾患群は髄液 AD バイオマーカー陽性 32 症例を AD 群、陰性 25 例を非 AD 群に分類。認知機能評価、脳血流シンチグラフィーに加え、漢字読み書き問題を実施し、比較検討を行った。

【結果】

漢字書字テストの正答率は、予想通り健常群、非 AD 群、AD 群の順で有意に低下し、AD 群では教育歴が正答率に影響した。誤答パターンを無反応、錯書に分類したところ、誤答における無反応率は、健常群、非 AD 群、AD 群の順で有意に増加し、AD 群でのみ無反応率が各種認知機能バッテリーと有意に逆相関した。さらに AD 群の高無反応率群と低無反応率群の比較において、教育歴、年齢、髄液バイオマーカーによる AD 病理指標は同程度にもかかわらず、高無反応率群で有意に認知機能の低下と左側頭葉後下部の血流低下を認めた。【結論】軽症 AD において漢字想起障害は認知機能障害と相関し、特定の神経ネットワークを介した AD 疾患抵抗性との関連が示唆された。